
CONVICTION

月丘夏雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CONVICTION

【コード】

N3616I

【作者名】

月丘夏雄

【あらすじ】

鉄格子をはさんで交わされる、囚人と看守の会話。罪はいかにしてその形を成したのか？罪の名を知ってしまったからには、『僕』はもう戻れない。

第一話 カイとヨハネ

ヨハネは小さく息をした。自分自身の存在を確かめるように。そして、薄暗いこの場所に存在する何かを見いだすように目を細くする。ほんの数メートル先に立っているカイの鋭い視線を全身に受けながらもヨハネは微動だにしない。

「今夜の気分はどう？」

腕を組んだままのカイが問い掛けると、鉄製の椅子に座っているヨハネは背筋を伸ばしてその問いに答える。

「とても落ち着いています。いつもと何も変わりませんよ。」

それを聞いたカイはゆっくりと歩みを進めてヨハネに近づく。しかし、二人の間にはその接近をはばむかのように、強固で冷たい鉄格子が存在していた。

「そうかい。だけど、こんな檻の中じゃ出来ることも限られてくるっつてもんだ……そうだろう？」

拳でコンコンと鉄格子を叩きながらカイは言った。その顔にはなぜか笑みが浮かんでいる。ヨハネはそんなカイの態度に何を感じているのか、黙ったままその様子を見ていたが、やがてその口を開いた。

「あなたは何が言いたいんですか？」

それを聞いたカイは、灰色の天井を見上げて大きく息を吐いた。

「あんたの話聞くようになって以来、何だか夜も眠れなくてさ……良かったらまた聞かせてくれないか？」

ヨハネはその問いに答えるように右手を自分の胸に当てた。しばらくして、左手を前に差し出し、カイにも椅子へ腰掛けるよう進めた。カイは何度もうなずきながら、木製の椅子に腰掛ける。それを見たヨハネは満足そうに目を細めて微笑んだ。その様はカイとは対照的で、見事なアルカイツク・スマイルだった。

「罪を罪だと己が認識することで、罪はその形を成すことになるの

です」

ヨハネはそう言うと、胸に当てていた右手を離してその手のひらで自分の視界を遮った。

「罪の名を……それでは、始めましょう」

二人の長い夜は、こうして始まった。

第二話 少年と優等生

「僕が初めて人を殺したのは、十四歳の時でした」

ヨハネはゆっくり右手を下ろすと、両手を膝の上で組んだ。そのまぶたはしっかりと閉じられていて、情景を詳細に思い出しながら話そうとしている様子が見て取れる。

カイはといえば、そんな物々しい仕草を一つも見逃すまいというように、ヨハネを見つめていた。

「僕はそれまで誰かを愛したこともなく、愛されたという実感を得ることもなく生きてきました。それでも普段は優等生の仮面を着けて、退屈なばかりの毎日を問題を起こすこともなく過ごしていました。ですが、心の奥底にはただやり場のない不満ばかりが募っていたのです。ある日、いつものように学校の授業を終えて家に帰ると、父がいつものように母を罵倒し、殴りつけていました。僕はそれを見なかったことにして、そのまま外へと出て行きました。行き場を無くしてふらふらと街をさまよっていると、不良達が同級生の少年を囲んで殴りつけていました。少年とは顔見知り程度の中だったので、関わり合いになりたくなかったのですが、彼は必死な顔で僕に助けを求めてきました。僕は学校の中では目立つ存在でもなく、喧嘩もろくにしたことはありませんでしたが、不良達は僕の顔を見ると、何故か少年にも興味を無くしてどこかへ行ってしまうました。少年は僕に『ありがとう』と言いました。僕はそんな礼などどうでも良かったのですが、別にどこかへ行く宛があるわけではありませんでしたし、彼がやたらと興奮して『話したい』と言うので、少し付き合うことにしました。二人で川原まで歩いていくと、彼はポケットから刃渡り15センチほどの折り畳みナイフを取り出して、僕に見せました。『いざとなればこれで抵抗するつもりだった』と笑いながら彼は言いました。なぜかは分かりませんが、僕はその時、急に彼のことが憎らしくなり、彼の横っ面を思い切り殴りつけました。

すると、折り畳みナイフは彼の手から落ちて、彼と同じように川原へ転がりました。彼は何が起きたのか分からないといった様子ではらく地面に寝転がっていました。僕が怒りをあらわにしていることが表情から見て取れたようで、不意に立ち上がると、怯えた顔をしてそのままどこかへと走り去ってしまいました。後に残された僕は、ゆっくりと折り畳みナイフを拾い上げ、ついた砂を落とすと自分の胸ポケットへとしまい込みました」

ヨハネはここで一度言葉を切り、大きく息をした。それを見た力イも同じように大きく息をする。しばらくの間、静寂が空間を支配した。

第三話 痛みと覚醒

やがて、ヨハネが再び口を開く。

「そしてその夜、僕は家の二階にある薄暗い自分の部屋で一人、手に入れたナイフをずっと見つめていました。何か……自分の心の奥底に押し込めていた感情が、ゆらゆらと揺れ動くのを感じ、僕はほんの少し恐怖を覚えながらも、その鈍い輝きの刀身から目をそらすことが出来ないでいました。なんて美しいのだろう。どうしてこんなに惹かれるのだろう。そんな声が頭の中に響き渡ります……どれくらいそうしていたでしょうか。不意に、階下から酔った父の怒鳴り声が聞こえてきて、僕は陶酔から現実へと一気に引き戻されました。それもいつものこと。またか、と思いつつも今夜はこの新鮮な感覚を邪魔されたくないという気持ちはどうしても頭から離れません。その時、僕は……これは今でもうまく感情を説明出来ないのですが……父の声を掻き消したくなったのかもしれませんが。目の前にあるナイフを右手で握り締めた僕は、それを自分の左肩へ水平に突き立てました。身体中に走る激しい痛み。思わず悲鳴をあげました。しかし、階下からは相変わらず父の怒鳴り声と物が派手に壊れる音ばかりが聞こえてきます。家族は誰も今の悲鳴に気づいていないのです。肩に突き刺さっているナイフを思い切って引き抜くと、真っ白だったシャツが恐ろしいほどの速さで赤く染まっていきます。その時、僕は妙な恍惚感を覚えました。そして心の奥底に隠していた、どす黒い感情が頭の中へ一気に流れ込むのを感じました。それはまるで、散らばっていたパズルのピースが元の場所へと綺麗に当てはまっていく時のようで、とても快感でした。初めからそうであったかのように、考えが頭の中で一つの形になりました。僕は確かにこの瞬間、覚醒したのです」

ヨハネはここで急に目を見開いて、カイを見据えた。カイは身じろぐこともなく、黙ったままその視線を受け止める。

第四話 父と母

「……そして、その後のことです」

ヨハネはカイから視線をそらすことなく話を続けた。

「僕は頭の中を、真っ白な何か……得体の知れないものに支配されているような高揚感と恍惚感に包まれ、そのまま手にしていたナイフと共に部屋を出ました。一階にある応接間へ降りていくと、そこはひどい有様で、部屋中に割れた皿や砕け散ったコップの欠片が散乱していました。父はまだ母を殴りつけています」

ヨハネの話す声が、段々と速度を増していくのがカイには分かった。ヨハネは情景を思い出して興奮しているようだ。その表情は笑っているようにも、泣き出しそうにも見えた。

「床へ倒れ込んだ母に僕が駆け寄って膝をつくと、父は僕の手にしていたナイフを見て後ずさりしました。こんな小さなナイフでひるむような男なのだと分かって、父への怒りは最大限に達しました。そして、失望。なんてこの男はくだらないんだ……そんなことを思っていることに気づいて、小さく悲鳴をあげました。父もきつとそれには気づいているのでしょうか、それよりもナイフが気になるように、その場から動けないでいました。僕が『もう大丈夫だよ、母さん』と言うと、自分は殴られて唇が切れているというのに、母は僕の心配をして、『どうしたの、その傷は！早く血を止めないと！』と言ったのです。その言葉を聞いて、僕の視界は涙でにじみました。そうか、今まで母が父の暴力を抵抗もせず黙って受け入れていたのは、母が弱い人間だからではなく、僕を守るためだったんだという事にやっと気づいたのです。これが母の愛というものなのか。今までそれに気づけなかった僕は何て愚かなんだ！僕は母から、確かに愛されていたのです。それをはっきりと意識した時、僕はある決意をしてナイフを強く握り締めました。母は僕を気遣うように寄

り添い、そつと僕の顔をのぞき込みました。僕はこれ以上、母が父からこんなひどい仕打ちを受けないようにと強く願い、そして……」

ヨハネは肺の中にあつた空気を全て使って、ここまでの話を感情を交えながら話した。息が少し乱れている。息を整えるようにゆっくりと何度か深呼吸をして、ヨハネはまた先程のようにまぶたを閉じて次の言葉を選んだ。

第五話 凶器と解放

「僕はナイフを母の胸に突き立てました」

それを聞いたカイは身震いした。ヨハネの声はとても冷たく無感情で、その様はまるで機械のようだった。その衝撃的な告白は、まるでヨハネを人間以外の存在であるかのように見せた。

「母はとても不思議な顔をしていました。一言も発しないまま自分の胸を見て、突き立てられたナイフの柄を握る僕の手にとつと触れました。そのまま素早くナイフを引き抜くと、母は小さく息を止ました。それと同時に、胸から真っ赤な命が止めどなく溢れ出し、僕の全身や床や壁を染めました。その時、母と僕の血が同じ色だということに何だか感嘆したのを覚えています。母は僕の目を真っ直ぐに見て微笑むと、触れていた両手を静かに離し、そのまま床へと崩れ落ちました。父は何が起きたのか分からないという顔で、その一部始終を黙って見ていました。やがて恐怖に駆られたのか、悲鳴をあげながら家を出て行きました。僕はといえば、母の命を奪った凶器を握り締めたままその場に立ち尽くしていました。倒れ込んでいる母の身体は全く動きません。よく見れば、その床には大きな血溜まりが出来ていました。ああ、母の顔は安らかな顔をしています。母はきつと、僕の感情を理解してくれたのだ。そう思いながら、その寝顔をずっと眺めていました。これでもう、母が父に苦しめられることはない……そう思いました。僕はその時、本気でそう思ったんです」

ヨハネは右手をまた胸に当てた。そして懺悔するようにまぶたを閉じてうつむいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3616i/>

CONVICTION

2011年1月9日02時52分発行